

新刊紹介

中手集落史「萬日記覚帳」

中手地域づくり会 編 2020年10月発行 A4版 207頁

阿部 敬

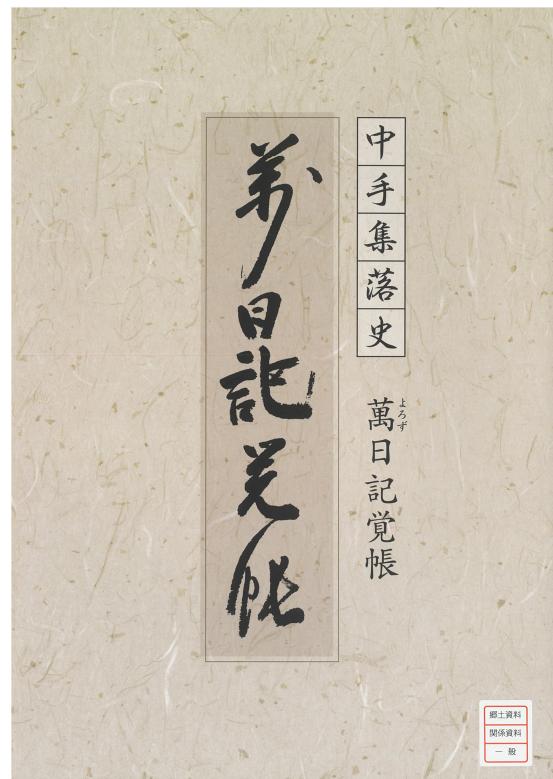
この本を手に取ったのは、まだ刊行間もないころ、当博物館に寄贈されて事務室の「今月の図書」にあったからではなかったか。十日町市民の郷土愛の深さに慣れてしまつたためか、その時はあまり気に留めずパラパラとめくるだけに終わつたように思う。それから一年ほど経つてから、十日町情報館（市の中央図書館）で二度目の出会いがあった。この時ちょうど県内の年中行事の文献調査をしていたこともあり、心のアンテナが立つていたのだろう、自然と目が留まつたのである。一読してみるとその内容の豊富さに驚くとともに、著者の故郷を思う気持ちに心が揺さぶられた。中手地域づくり会顧問、水落昭作氏の序にこうあつた。「故郷を語り継いで大切にしたい」。なんともまっすぐな一言ではないか。

本書は大きく第1～9章と資料編とで構成されている。

- 第1章 中手ムラの変遷
- 第2章 ムラの地形と県道真田・高島線の変遷
- 第3章 ムラの信仰
- 第4章 中手川と用水・名水
- 第5章 生業と服飾
- 第6章 ムラの構成と運営
- 第7章 戸口の推移と仲間の連携
- 第8章 限界への危機と地域づくり つぶさな観察記録
- 第9章 思い出集（地域づくり会員）

本書のすべてを紹介することは到底できないのでいくつか絞つてみてみたい。

第1章では、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで敗戦した江村藤左衛門が浪人として鎧坂村に入植し、1624以降に中手を開いたとの伝承を記し、その後の歴史を平成30年まで追っている。江村氏については江村重良（1992）「江村氏考」なる手書きの文章を参照しており、



それに基づくと18世紀前半に水内氏、19世紀後半に高橋氏が入植したようである。ムラの始まりはしかし、「その他の資料」を加えて検討すると「最初の草分けは慶長17年（1612）頃ではないか」という。資料間に齟齬があるので確定はしがたいが、域内における中世から近世への移行期における開村状況を示す貴重な資料といえるかもしれない。こうした資料の丹念な積み重ねが地域史にとってどれほど重要かを思い出させてくれる。

第6章では、屋号と家系の詳細や消防団の活動などが語られている。本家・分家の関係が一覧表と住宅（屋号）配置図によって明らかにされており注意をひく。家間の関係とはつまり親族関係にほかならず、集落史の民

俗調査であれば最初に取り組まなければいけない重要課題のひとつだが、入り組んだ関係を解きほぐすのは容易ではない。労作のひとつとえよう。

明治11年5月に隣村である鉢（はち）の本村で火災が発生し、十二社を含む17戸が焼失する大火であったらしく、おそらくこれをきっかけにして明治13年に南・北鎧坂村防火組が組織された経緯が記されている。中手は南鎧坂村枝村だったので独立した組織は持たなかつたが、大正4年には鉢・中手に公設消防組が編成されたようである。その後も含めて組織化の経緯がかなり詳しく記されている。現在の十日町市は、平成期に中越地震、中越沖地震、長野県北部地震と数年おきに3度の地震を経験し、その都度自主防災組織が活躍しており、防災意識が高いと言われる。地域の消防団の設立や経緯に対する関心の高さがこうした過去の経緯にも目を向けさせているのかもと想像した。

第8章は、少子高齢化が著しく過疎化の一途をたどっている集落が大地の芸術祭をきっかけにして、新しい地域づくりに取り組む姿を追った貴重な記録となっている。芸術祭の概要とか十日町市全体の動向のような、大きな動きを外部からとらえた記録は多く存在するが、一集落の見え方やその動き、雰囲気を内部から観察し続けた記録は多くはない気がする。集落にある人々が自ら語る「事実」を記録しつづけることが重要である。

地域づくりの核の一つに「中手の黒滝」がある。十日町市博物館HPによると、「中手の黒滝」とは、「普通河川浅河原川の支流である中手川が流れ落ちる高さ約20m、幅約20mの滝です。」とあり、また「滝の背後には魚沼層の露頭がみられます。春には雪解け水が迫力をもって流れ落ち、秋には鮮やかな紅葉に彩られるという、優れた風致を誇ります。滝の規模は県内有数です。」とある。平成29年3月30日十日町市指定文化財(名勝 第3号)に指定されている。この指定の端緒となったのが他ならぬ地域づくり活動だった。「地域づくりの一環として先人の知恵と工夫の足跡を集落繁栄の象徴として伝えるため、黒滝周辺の環境整備に取り組むことにした。」とある。

この始まりは平成27年5月であったという。これ以後、遊歩道の整備、展望台の整備、石抱きケヤキの発見、清酒「幻の黒滝」の開発と次々と幅を広げ、平成30年7月には公益財団法人あしたの日本を創る協会、NHK、読売新聞が主催するアワードで、中手地域づくり会が「振興奨励賞」を受賞するに至った。地域自治活動の模範のような事例であり、まるでサクセストーリのようにも

見えるが、本書の文面からはさまざまな労苦があったことがにじみ出ており、ある意味でのリアルを伝えているようにも思える。

集落史というと、自治体発行の都道府県・市町村史の流れの末端のようにも捉えられるが、本書においてはその風合いを残しつつもあくまで内部からの視点へのこだわりが感じられる。この視点によって、行政史や制度史のようなある意味では退屈な（失礼）文字の並びに血が通い、温もりを与え、本当の意味での人々の歴史を紡いでいるように感じさせてくれる。だからこそ人の心に訴えてくるのである。素晴らしい書であることはいうまでもない。

最後にひとつだけ欲を言わせてもらいたい。できることなら執筆者の膨大な知識の背景となっている諸資料・文献を記してほしいということである。「野の学問」ともいわれる民俗学ではアカデミックなルールや行政文書のような正確さに縛られないからこそ、主観的でリアルな生の体験を語りうるといわれ、もちろんそれは承知しているが、たとえば若い読者や、私のように地域史に疎いとか、調べ物をしていたりして事実を詳しく知りたいと思っている読者には、「そこの情報をもう一步・・・」となるような気がする。集落史を後世に伝える本書の意義に照らして、是非とも資料をたどれるようにしていただければと願うのである。

しかし文献がないからといって地域の生の声をまとめた形で残すことの大切さが損なわれることは全くない。こうした書が地域を想う人々の手で形になっていることを心から喜びたい。それもまた「地域づくり」のひとつの礎となるはずである。